

努力を無駄にさせない一言

1. 教育を考える一言

「明日からの中間テスト、絶対に部活の大会があったことを言い訳にするな。」

2. 背景

私は中学3年間、吹奏楽部に所属していました。特にマーチングコンテストには顧問、部員ともに強い想いがあります。マーチングとは、楽器を演奏しながら隊列や模様を自由自在に形作り演技するものです。夏の暑い体育館の中で曲を演奏しながらフォーメーションを何度も何度も練習していました。時には、フォーメーションがそろわないことで、仲間の部員に対してきつい言葉をかけ、もめることも多々ありミーティングの回数は数えきれません。精神的にも肉体的にもつらい練習でした。そんな必死の練習でも1、2年生の時は、あと一步のところまで全国大会の切符を逃すという悔しい想いをしてきました。しかし、その悔しさをバネに3年生最後のコンテストで念願の全国大会出場することができたのです。プログラム一番という悪条件の中、私たちはゴールド金賞をとるという最高の結果をだすことができました。審査員から「ゴールド金賞！」と言われた瞬間のことは今でも忘れません。応援に駆けつけてくれた部員の保護者、OB・OGも含めた全員で喜びを分かち合いました。そして最後、会場の大阪城ホールの外で顧問の先生からまとめの話があります。そこに含まれていた一言が私に教育というものを考えさせられるものでした。

3. 考察

一言から分かるとおり、大会の翌日には中間テストがあります。これだけ大事な大会があれば、普段よりもテストの出来が悪くなるのは仕方のないことかもしれません。しかし、顧問の先生は、それは言い訳でかっこ悪く自分の努力に泥を塗ることになることだと言いました。私の学校の吹奏楽部は強かった分、周りからの風当たりもとても強かったのです。他のどの部活の生徒よりも、校則を守ることを求められ、時にはなぜ吹奏楽部のみ注意されほかの部活はなぜ注意されないのかという時もあります。今回も部員の中間テストの結果が極端に悪かった場合、きっとそれは問題になっていたことでしょう。そうなれば、たとえ全国大会で金賞という立派な成績をおさめたとしても、「なんだ、学生の本分である勉強をおろそかにしているようじゃねえ。」と言われ、自分たちの努力に大きな傷をつけることとなります。本当は誰よりも一番喜んでいたい顧問の先生ですが、部員たちの努力を知っているからこそ、それを最後で台無しにさせないよう促したこの一言に私は教育というものを考えさせられました。

参考文献

丸谷 明夫『必ず役立つ 吹奏楽ハンドブック 指導者編』ヤマハミュージックメディア、2013年